

Ⅲ. その他の問題 … 経営・生産技術等

「従来当社ではパイプ、丸棒を購入し、切断機を用いて適切な長さに切断する仕事为主であった。このような業者はいくつもできており、何か特徴を持たなければ企業として生き残れない。そのためには、何か商品加工しなければならぬ。そこで、旋盤、ネジ切り機を導入、付加価値のつく仕事をはじめた。ところが、社長は経済学出身なので技術面では弱い。社内に旋盤を使えるものが誰もいない。加工に関する基礎的なことのできる人を養成することにした。やがてはNC旋盤を入れて加工システムを拡大したい。」

(KK商事、資53)

「一般に、相当むずかしいことをやるように品質管理を考えているが“工作者がひとつひとつの品物を大切にみつかる”ということであろう。自分の品質を保証するためには自分のところでどういうことをやっていたらよいか、次元は低くなるがそのようなことをセンターでやってほしい。」

(Ch電機、資53)

「メンテナンスには確かに旧来の技能が残っている。メンテナンスには新しい技術の手がつかない。だから、機械の具合が悪ければ専門家を呼ばよいいのだという考え方で今のところやっている。しかし、零細企業では何台も同じ機械を用意しているわけではない。たとえば、東京から専門家を呼んで故障を直したのでは期限内に間にあわない。ところがメンテナンスを工場内で行うにはベーシックなことがわかっていなければどうにもならない。このようなメンテナンスのできる人を各工場で育てなければいけない。少なくとも各工場でそのような要員を確保できなければ地域にそのような専門のグループがあってもよいとおもう。」

(Ma製作所、資50)

「極端に言えば、人間性の喪失がおきている。ということは過去におけるベーシックな人間の人間らしさが失われているだけでなく、その時点において第一線で活躍するはずの人がひとつのエレメントとしてしか認められなくなるわけで、エレメントが機械にとっついていくという形である。だから、次の段階で別の仕事にかわるとき

にこれまでのエレメントは使えなくなる。そして、工場内での熟練者は減少していくと思う。その人数が減っていったとき、その熟練が価値をもつ時代がくると私は思う。数少ないベテランの生きてくる時代がくると思う。ただし、現在育てられている若者達が第一線にいったときに一番始末におえなくなる。ともかく行く場がなくなるのではないだろうか。」 (M a 製作所, 資50)

「零細では、“まずオヤジさんが勉強しなさい”ということである。オヤジが勉強しなければ下の人はどうにもならない。例えば、NCに従業員が勉強に行ってきたらオヤジが従業員に教えられてしまう。また、従業員の打ったプログラムを見ても仕上がりの時間が考慮されているかどうかわからない。良い製品が短い時間でできるかどうか、経営者としてプログラムの知識を最初にもっていなければいけない。」 (I K 精機製作所, 資50)

「中小企業の品質管理はものすごくウェイトが高まっている。機械で物を作ること自体は、良い機械も出ているのでそれほど問題はないが、できたものを検査し、どのように管理するかは最終的には人間がやらなければならない。10年前は親企業が仕事をだすときに、どんな機械をもっているかを聞いた。今は、品質管理をどうやっているかが一番はじめに問題にされる。だから、各企業レベルでできる品質管理をわかりやすく教えてほしい。従業員5～6名でやっているところだったら、どの程度の品質管理ができるか、すべて大企業がやっているような品質管理はできない。」 (C H 工業, 資50)

「(保全課の要員がセンターの旋盤作業の基礎コースを利用した)とても助かった。システムに故障があったときに即対応することが重要である。一時凌ぎでよいのだから、応急処置ができればよい。精度が高くないといけない面は一部にあるが、多くは精度があまり要求されない。本物のパーツ類を後日、メーカーから入手する。このような応急処置における工作技能は価値がある。部品を多数製造している工場での工作技能とは違う。」 (N H ㈱大, 資53)

「景気が悪く、比較的に時間的余裕があるので従業員教育をこの際
に実施することにした。自動機は汎用機の原理の上に成り立っている
ので汎用機がわかると、メンテナンスの面で異常が起きたときの
対策の仕方基礎がわかっていると応用としての対応ができる。例
えば、治具が摩耗して“心”が出なくてグラついていても、そのよ
うなものとしてやっているが、基礎を勉強すると、“これはセンター
がでていないぞ。おかしいぞ”ということになる。これは基礎がな
いとできない。」 (KT工業. 資53)

「どんなものにも対応できる人間を作っていかなければならない。
工場は効率よくするために機械がワンタッチになっている。本当の
意味で旋盤、フライス盤を動かすということはできなくなっている。
ゆえに、センターで勉強させたい。そうしないと人間的にゆがんで
しまう。」 (KT工業. 資53)

「いろいろな機械加工をやっているのだけれども、ボール盤を自動
化したいと思っても今まで手を出せなかった。シーケンス制御の基
礎を学んだので、手を出せるようになった。チャレンジ精神、自分
に関連するところをなおそうとする気がでてきた。それが喜びとな
っているようだ。」 (S a i 製作所. 資53)

「作業者のレベルのばらつきが大きいから、できると思ったができ
なかった。納期はくるし品質は悪いし、いいことはなかった。2~3
名のグループで一つのものをおこなう。いまネックになっているの
は、あまりわけ過ぎてしまって不満がでていいる。俺達もやりたいと
いう気持ちがある。もう少し人員を多くして、なんでもできるように
作業を回してみたい。そうすればものを作る喜びを味わえる。」
(M製作所. 資79)

「多量技術はアジアの諸国に移るかも知れないが、固有技術は残る。
その固有技術をいかにして残すかを考えるべきで、固有技術をしっ
かりと活かすためには、<基本>をしっかりと教えなければいけな
い。技能がバットしないと、いい機械があっても本当に使いこなせ
ない。」 (M製作所. 論1)